

⑬ 統計学グループ運営委員会

本委員会は、20年4月、6月、9月、12月、21年3月の計5回開催し、統計学の教育の学士力について検討した。学問分野共通に身につけるべき基礎能力をとりまとめ、まとめることとし、昨年度に本委員会で作成した学問分野共通コア・カリキュラム案、「21世紀の知識創造社会に向けた統計教育推進への要望書」など参考に、①統計データの有用性を理解し、結果を客観的に評価できる力、②確率を用いて実際に問題整理ができる力、③因果関係の検証に統計手法が使える、④分野の課題解決に統計的課題解決（目的に応じた課題の設定計画、データの調査・収集、整理・分析、結論の導出の手順）を行うことができるとして整理し、インターネットで統計学担当教員（サイバーFD研究員）113名に意見を求めたところ、19名から「データに潜む危険性の把握が必要、確率論の理解は不確実性を伴う現象だけが対象ではない、因果関係の検証が統計的課題に包含されている、確率の概念が推測統計学の理解であれば不要」などの意見を踏まえ、さらに社会人の意見「因果関係の前提条件についての理解を深めることが大切、手順の習得も大切だが代表性、調査票作成のポイントなどの理解が大切」を加え、以下の通り中間的にとりまとめた。

<統計学教育における学士力>

1. 社会における統計データの重要性を理解でき、それから導かれた結果を客観的に評価できる。
2. データを統計的に整理し、表やグラフを用いてデータの特徴を説明できる。
3. 統計的な調査や実験の仕組みを理解し、母集団の特徴を表現できる。
4. 因果関係を検証するために統計的手法を活用できる。
5. 統計的な考え方・技能を活用して、実際上の問題に取り組むことができる。

その後、詳細な学士力の検討、評価測定など21年度に検討することを確認した。